介護福祉学生の専門職としての自覚や資質についての意識調査

－1年次生と2年次生の比較より－

宮堀　真澄[1)]　鈴木　圭子[2)]　三浦　正樹[3)]

A Survey of Care and Welfare Students on their Thoughts about the Awareness and Quality as Professionals

－Comparison between first and second year students－

Masumi MIYAHORI　Keiko SUZUKI　Masaki MIURA

要旨：介護福祉学生が、学内学習及び介護福祉実習という一連の学習過程から、専門職としての自覚や資質をどのように捉えているのか、社会的スキルと合わせ分析した。学生は、介護福祉士として求められる資質には、人間関係形成能力や温かいパーソナリティー、分析的・論理的思考能力が必要であると捉えている。しかし、社会的スキルの観点から対人関係を捉えると今後介護福祉士養成教育において体系的に対人関係能力を育成していく必要性が示唆された。

キーワード：介護福祉学生、専門職、資質、社会的スキル、介護福祉士養成教育

Summary : The purpose of this study is to examine the process of acquisition for awareness and quality as professionals from the lectures, training, and social skill as well for care and welfare students. The results show that the students need to have ability of human relations, compassion, analytical and logical thinking for certified care worker. We need to cultivate the ability of personal relation systematically on care and welfare education with considering personal relations as the skill.

Key words : care and welfare students, professional, social skill, care and welfare education

Ⅰ．はじめに

介護福祉実習は、介護福祉利用者との人間的関わり合いにより、理論として学んだ専門的知識や技術を実践的に学ぶことにある。また、利用者との関わり方を通して、自己の体験を客観化するプロセスが必要である。「実習指導」の授業において、理論と実践の統合を図ると共に、介護福祉専門職としての自覚を促し、専門職に求められる資質、技能及び自己に求められる課題把握など、総合対応能力を習得できるよう指導することが目標として挙げられている。

日本赤十字秋田短期大学（以下、本学とする）では、介護福祉実習Ⅱで初めて担当ケースを受け持ち、介護過程の実践展開を通し、利用者理解を深め、利用者の生活の質の充実を図るための援助方法の理解、個別介護のあり方等を学ぶことを目標に挙げている。

学生は初めての担当ケースで不安と期待感をもって実習に臨みながらも、学内での学び、そして介護福祉実習という一連の学習過程から、介護福祉専門職としての自覚や専門職に求められる資質をどのように捉えているか明らかにしたいと考えた。

また、学生が将来介護福祉士としてその専門性を発揮していくためには、利用者との間に信頼関係を築くことが鍵となる。介護福祉士が提供する

介護福祉学科　1）講師　2）講師　3）助教授

本文は、第9回介護福祉学会大会において発表したものに加筆したものである。

ケアが有効なものになるには、どれだけ援助的な人間関係が結べるかが重要なポイントとなる。そのためには対人関係を円滑にする能力を養っていくことが必要と考える。学生が実習を通しあるいは日々の生活を通し、どの程度社会的スキル（social skills）を身につけているのかも合わせて調査した。同内容を介護福祉の概論を学んで間もない１年次生も同様に調査し、その比較を行い考察したので報告する。

＜用語の操作的定義＞
社会的スキル：対人関係を円滑にするために役立つ技能

Ⅱ．研究目的

介護福祉実習Ⅱ終了後、学生は利用者との関わりを通し、自己の体験を客観化するプロセスにおいて、専門職としての自覚あるいは資質をどのように捉えているのか、社会的スキルとの比較より明らかにする。

Ⅲ．研究方法

１．調査対象

本学介護福祉学科第５期生（２年次生）と、第６期生（１年次生）を対象とした。２年次生は、介護福祉実習Ⅱ終了直後の時期である。介護福祉実習Ⅱ段階は、２年次前期５月より４週間180時間実施する。実習内容は、介護福祉実習Ⅰをふまえ、利用者個々に応じた介護の実践を目標とし、受け持ち利用者の介護過程の展開を行う。実習施設は特別養護老人ホーム・身体障害者療護施設で、実習施設の特性に合わせ実習を行っている。

１年次生の授業の進行状況は、赤十字活動論のみ終了し、介護概論・社会福祉概論・老人福祉論・介護技術等進行中である。

２．調査期間

２年次生は、介護福祉実習Ⅱ終了後、担当授業「実習指導Ⅱ」の事後指導初日６月４日に実施した。

１年次生は介護技術（単元－観察）担当授業時間内６月12日に実施した。

３．調査方法

１）授業の一環として　調査の主旨、分析方法を説明し、了解を得たうえで記名式で行った。

２）調査内容

①「介護福祉士に求められる資質」について自由記述式で回答を求めた。

②社会的スキル測定

社会的スキルの測定には、菊池[1]が1988年に開発した18項目５段階評定の質問紙 KiSS-18を使用した。本尺度は、包括的な社会的スキルを身につけている程度を測定する尺度である。社会的スキルは、初歩的なスキル・高度のスキル・感情処理のスキル・攻撃に代わるスキル・ストレスを処理するスキル・計画のスキルの６要素からなり、それぞれ３項目ずつから構成されている。全体得点は90点から18点までである。質問紙の信頼性、妥当性は確保されている。

３）分析・集計方法

①自由記述の記載内容を、１要素１内容に分類したものを単純集計し、小項目とした。さらに大項目に分類し、それぞれのカテゴリーに命名を行った。秋山[2]が作成した「介護福祉士の専門職性の要素とその条件」を参考とした。

②社会的スキルは、１年次生と２年次生の尺度合計得点とその平均値を求め、差の検定を行った。

Ⅳ．結果と考察

２年次生在籍数54名（男子６名・女子48名）のうち、出席数47名（男子５名・女子42名）であった。回答率87％であり、有効回答率は100％であった。回答者の平均年齢21歳、男子27.4歳、女子20.3歳であった。

１年次生在籍数58名（男子15名・女子43名）のうち、出席数54名（男子13名・女子41名）であった。回答率93％であり、有効回答率100％であった。回答者の平均年齢18.3歳、男子19.1歳、女子18.5歳であった。

１．「介護福祉士として求められる資質」についての自由記述の記載内容（表１・２）

１）１年次生と２年次生の比較より

２年次生は、記載総件数は713件であり50個の項目を得た。１年次生は、記載総件数は724件であり51個の項目を得た。これらの項目から、回答数の多かった上位10位（回答者の約半数の数）までを順位別に挙げたものが表１・２である。

２年次生46件、１年次生49件と各学年共「よい人間関係を築ける」の項目が最も高く、次に「専

門的技術」２年次生42件、１年次生43件を挙げていた。２年次生は、以下高い順に３位「コミュニケーション技術」41件、4位「健康」40件、５位「判断力」35件、６位「明朗活発」「優しさ」33件、７位「観察力」32件、８位「思いやり」31件、９位「創造力」「忍耐力」26件、10位「責任感」24件であった。

１年次生は３位「健康」42件、４位「専門的知識」41件、５位「コミュニケーション技術」40件、６位「判断力」「思いやり」38件、７位「共感」31件、８位「受容」27件、９位「積極性」「優しさ」24件、10位「温かい心」22件であった。

「よい人間関係を築ける」の項目では、「信頼される人・信頼関係を築ける人」という内容を挙げていた。一番に挙げた理由は、やはり介護福祉士として、意志疎通を図り介護を必要とする人との信頼関係を築くことのできる資質・能力を身につけておくべき最も基本的なものと自覚されてのことと考える。

「専門的技術」に関しては、２年次生は「ニーズに応じた・安全安楽な・苦痛を与えない・正確・丁寧・機敏・介護技術」という内容であった。１年次生は「優れた・実践できる・正しい・安全・介護技術・ニーズに答えられる」等を挙げていた。介護は「実践の学」である。実践力、すなわち介護の理念を具体化する手段、すなわち介護技術を挙げた理由と考える。

「コミュニケーション技術」に関しては、２年次生は「傾聴・話し上手・聞き上手・理解しやすく話す・安心感を与える・ゆっくり丁寧・話題の豊富さ・タイミング・笑顔や意欲を引き出す・敬意をもった・悲観的な利用者への声かけ」等多岐にわたる内容であった。１年次生は「共感・受容・自分の気持ちを表現できる・聞く力・表現豊か・言葉使い・聞き上手」等であった。コミュニケーション技術は、人間関係を形成するための介護技術である。技法の基本は、相手の理解、受容的な態度、共感的態度、傾聴等が挙げられるが、信頼関係を築いていくうえにも人間理解を深める関係づくりが必要であり、共感的理解をしないかぎり深まりを見いだすことはできない。そのことが深く理解できた実習であったのではないかと考える。実習反省レポートから、「利用者と会話をするとき何を話してよいかわからない」、「共通の話題が見つからない」等といった世代の違いからくる会話の話題の問題や、声かけなどしながら表面上は問題なく介助していても、利用者のそのときの気持ちを理解して対応するといった共感的コミュニケーションをとることの困難性もある。実習中における利用者とのコミュニケーション場面の振り返りをしながら、どのような対応が望ましいのか気付いていけるよう指導がさらに必要である。

「健康」に関しては、２年次生は「自己の健康管理が大切・体力・ストレス発散」という内容であった。１年次生は「心身の健康・体力」であった。介護の道具は自分自身であり、安全な技術である。よって常に心身が安定しとぎすまされた精神状態を維持できなければという認識からと考えられる。２年次生は４週間の実習期間において、施設に宿泊したり、通学、夜勤実習等の体験から特に強く感じたものと思われる。

総じて２年次生は、実習という体験からより現実的に捉えている。また、１年次生は現時点での学習、あるいはボランティア体験等から捉えたと考える。

表１　介護福祉士に求められる資質２年次生
上位10位の記載内容と件数

内　　容	記載件数（%）
１．よい人間関係を築く	46（6.5）
２．専門的技術	42（5.9）
３．コミュニケーション技術	41（5.8）
４．健康	40（5.6）
５．判断力	35（4.9）
６．明朗活発	33（4.6）
優しさ	33（4.6）
７．観察力	32（4.5）
８．思いやり	31（4.3）
９．創造力	26（3.6）
忍耐力	26（3.6）
10．責任感	24（3.4）

N=713（単位：件　複数回答）

表２　介護福祉士に求められる資質１年次生
上位10位の記載内容と件数

内　　容	記載件数（%）
１．よい人間関係を築く	49（6.8）
２．専門的技術	43（5.9）
３．健康	42（5.8）
４．専門的知識	41（5.7）
５．コミュニケーション技術	40（5.5）
６．判断力	38（5.2）
思いやり	38（5.2）
７．共感	31（4.3）
８．受容	27（3.7）
９．積極性	24（3.3）
優しさ	24（3.3）
10．温かい心	22（3.0）

N=724（単位：件　複数回答）

2）カテゴリ分類と回答数（表3）

カテゴリー分類で順位別に挙げたものが表3である。、1位「人間関係形成能力」361件（26.7%）、2位「温かいパーソナリティー」323件（24%）、3位「仕事に対する情熱や使命感」121件（8.9%）、4位「分析的・論理的思考」120件（8.9%）、5位「豊かな感受性や深い洞察力」95件（7.0%）、6位「専門的技術」85件（6.3%）、7位「心身の健康」82件（6.1%）、8位「人間尊重に立脚する価値観・職業倫理」79件（5.8%）、9位「専門的知識」56件（4.1%）、10位「行動力」30件（2.2%）であった。以下11位「自己啓発」24件、12位「柔軟性」19件、13位「発言力」9件、14位「自治能力」5件、15位「利用者に対する深い愛情」3件、16位「豊かな実践経験」1件であった。介護福祉士に求められる資質としての人間性を重視している結果と思われる。ただし、「専門的知識」が9位と低い結果であったことが懸念される。「分析的・論理的思考」が4位には挙がっているが、介護は、専門的知識と理論に裏打ちされた、個別性を尊重したものでなければならない。介護福祉士は質の高い介護サービスを担う専門職として誇りを持ち資質の向上を図っていくうえでも重要であるため、再認識していけるよう指導が必要である。

表3　介護福祉士に求められる資質
カテゴリー分類と記載件数

カテゴリー	記載件数（%）
1．人間関係形成能力	361（26.7）
2．温かいパーソナリティー	323（24.0）
3．仕事に対する情熱や使命感	121（ 8.9）
4．分析的・論理的思考	120（ 8.9）
5．豊かな感受性や深い洞察力	95（ 7.0）
6．専門的技術	85（ 6.3）
7．心身の健康	82（ 6.1）
8．人間尊重に立脚する価値観及び職業倫理	79（ 5.8）
9．専門的知識	56（ 4.1）
10．行動力	30（ 2.2）

N=1352（単位：件　複数回答）

2．社会的スキル測定結果（図1）

2年次生の社会的スキル得点を見ると平均値は58.7点（SD=5.3）で、男子56.8点、女子57.4点であった。菊池[1]が報告している一般大学生男子56.40点、短大生女子56.81点と比べほぼ同じであるが、女子がやや高い結果であった。1年次生は平均値62.4点（SD=8.3）、男子63点、女子62.2点で、2年次生より高い結果であった。t検定では、有意に1年次生の方が高い結果であった。介護福祉学科の学生が他の一般大学生と比較し、高い傾向があるのか、この結果からは言い難いが、介護福祉士という仕事が日々人との関わりの中で行われるものであることから、対人関係に不安を感じたり自信の持てない学生は、選択しない傾向があるのではないかとも考えられる。

また、2年次生が1年次生より低い結果となったのは、学内での人間関係が、仲がよい友達や、自分のことを理解してくれる人との関わりのなかでの生活であるが、実習においては、利用者との関わり、あるいは施設職員との人間関係により、自己を見つめる機会となり、対人関係の難しさをより敏感に感じとり、自己洞察の機会となったからではないかと考えられる。社会的スキル尺度の平均値は、高校生、短大生、大学生、成人の順に高くなっていくことが明らかになっている。今回は実習直後であり、実習前のデーターとの比較がないため限界がある。この点に関しては、今後継続的に実習前後に社会的スキルを測定し、実習の体験が及ぼす影響について2年間の横断調査を行い検討が必要と考える。

次に社会的スキル要素をみてみると、2年次生は、初歩的なスキル9.8点、高度のスキル10.4点、感情処理のスキル9.5点、攻撃に代わるスキル9.7点、ストレスを処理するスキル9.8点、計画のスキル9.5点、という結果であった。1年次生は、初歩的なスキル10.2点、高度のスキル10.9点、感情処理のスキル10.4点、攻撃に代わるスキル10.4点、ストレスを処理するスキル10.0点、計画のスキル10.9点、という結果であった。

両学年共、高度のスキルの要素を得意と認識していた。2年次生は、社会的スキル要素の中でも、感情処理のスキルと計画のスキルが低い傾向にあった。これまでと違った対人関係に戸惑い、感情表現をスムーズに行えなかったり、状況を十分アセスメント出来ず計画性が持てなかったためと考える。また、両学年共にストレス処理、攻撃処理の要素が低いことから、他者との関わりが困難な状況に陥った時の処理能力を育てることや、周囲の状況を冷静に判断しながら自己の考えを客観的に見つめる能力を養うことが今後の課題といえる。社会的スキルの観点から対人関係を捉えると、対

人関係のどこに問題があり、修正するにはどうしたらよいか、具体性のある実践を志向した分析が必要となる。実習経験を通してそれぞれのスキル要素が学習され、獲得されていくのか、検討していく必要性がある。また、日々の生活体験の中において、困難な状況を乗り切っていく経験をすることが社会的スキルを高めていく上で必要であると考えられる。

相川[3]は、社会的スキルを測定するにあたり、社会的妥当性の高い指標を取り上げるためには、対象者に特有な問題、あるいは認知や行動の特徴を把握しておくことが必要であると述べている。

今後は、「介護福祉士における社会的スキル」尺度の開発も必要と考える。

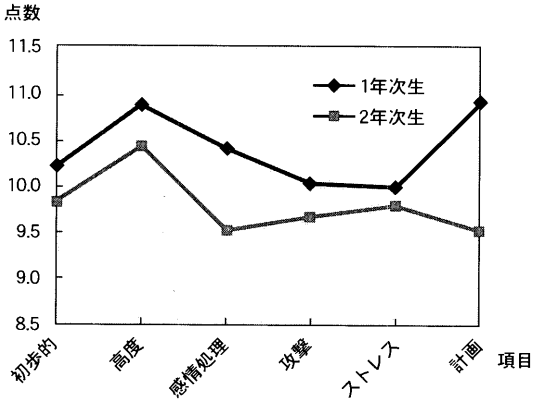

図1　社会的スキルの比較

V．まとめ

学生が介護福祉実習を経験し、あるいは学習より、介護福祉専門職に求められる資質をどのように認識しているのか、社会的スキルと合わせ分析した。実践から学ぶことが、介護の精神基盤を確立させるものであり、またそのような実践の態度によって介護者の品位が備わると考える。介護福祉士に求められる資質として「人間関係形成能力」を第一に挙げている事より、介護という対人援助の仕事は、人と人との関わり中に、その専門性があることを学生は実習により十分に認識している。しかしながらそのことを認識しながらも、利用者の気持ちに正面から向き合えず、共感的理解が難しい今日の学生たちにとっては、利用者とのコミュニケーションや社会的スキルの習得や向上を図ることが、介護福祉士になる上での必要不可欠な学習課題になってくると考える。

折しも、厚生省から公表された社会福祉士・介護福祉士の教育課程の改正内容も、そうしたことに対する教育の必要性を示唆された内容となっている。

介護の専門性を重視するならば、今後は、授業などでロールプレイなどを活用しながら、学生が対人関係能力を習得していけるよう授業に組み入れていくことがより重要になると考える。「介護における社会的スキル」の教育を介護福祉教育の場で体系的に実施する必要性があると考える。これはまた、介護福祉士が終生研鑽していくべき事柄でもあると考える。

引用文献

1）菊池彰夫・堀毛一也編著：社会的スキルの心理学，p177_183，川島書店，1994.
2）秋山智久：社会福祉従事者の実践と意識に関する全国調査，p48，大阪市立大学社会福祉学研究室，1996.
3）相川充著：人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－，p175，サイエンス社，2001.

参考文献

1）相川充・津村俊充編：社会的スキルと対人関係，誠信書房，2000.
2）相川充著：人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－，p175，サイエンス社，2001.
3）秋山智久著：社会福祉実践論，ミネルヴァ書房，2000.
4）斉藤耕二・菊池章夫編著：社会化の心理学ハンドブック，1995.
5）三澤昭文監修：介護における人間理解，中央法規，1999.